

【改頁】

昭和二十六年四月調査

小田の天然記念物 (ソノ二)

委員 佐藤清明

【改頁】

本冊子は昭和二十六年四月二日から四日まで三日間に亘って小田郡の島嶼を調査した際の手記である。

【改頁】

小田郡調査地

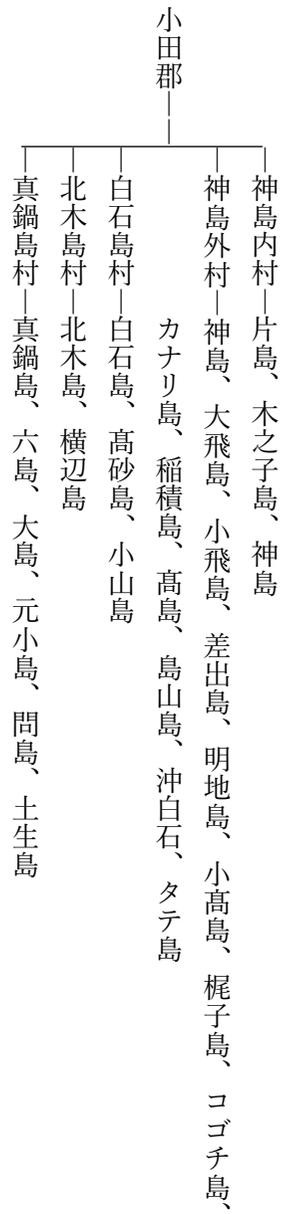
石井本陣の松	小田郡矢掛町	調査済
妙乗寺のソテツ	小田郡笠岡町	
空海衣掛のバベ	小田郡白石島村	今回調査 本輯所載
鎧岩	小田郡白石島村	
丸石の海蝕洞穴	小田郡白石島村	
真鍋島のホルトノキ	小田郡真鍋島村	
妙見のウバメガシ	小田郡真鍋島村	
真鍋大島のネズミギ	小田郡真鍋島村	
今井の短葉黒松	小田郡笠岡町	
鶉の宮の社叢	小田郡川面町	未調査
大照寺のハク	小田郡美山村	

以下続報

【改頁】

小田の諸島

小田の諸島は陸地の一塊が陥没して生じたもので、後に至り、それに噴火湧出した若干の島が添加して生じたと私は解しておる。岡山県全体に亘って直〇相交る二線の方向に構造線があり、その構造線に沿うて断層を生じ、その断層にはさまれた陸塊は陥落したが、陥没の程度の強弱によって種々の島形を成したのである。かくして生じた小田の諸島は現在約三十島あって、その管轄は次の通りである。



然し、これ等の島々の中には小島が多く、重点的に見れば

神島、高島、白石島、北木島、真鍋島、飛島、六島

と七島に分れ、他の小島はそのそれぞれに属して取扱うがよいと思ふ。私は昭和五年以来、神島に四度、高島に三度、白石に四度、北木に二度、飛

【改頁】

い、同庭にあるホルトノキの巨樹を視る。

ホルトノキは台湾、琉球等に多い熱帯暖帯性の常緑喬木で、ポルトガル人が持ち来ったとして此の名があると伝えるが、牧野富太郎博士によれば、実はホルトノキはオリーブに附した通称で、本樹をホルトノキと称するは○称の由である。然し乍ら矢張り慣用でしばらくホルトノキを用うることによる。(牧野博士は鹿児島県下の方言モガシを用いて本樹の私名とし、同氏の日本植物図鑑にはこれを正称とされておる。)

天然記念物

真鍋島のホルトノキ (一名モガシ) 岡山県小田郡真鍋島村四〇二六 真鍋龍太郎氏有

学名 *Elaeocarpus decipiens* HEMSL. (ホルトノキ科)

目通 七・八五尺 根元周 八・六尺 高 六間 齡 一五〇年

(岡山県唯一のホルトノキ、熱帯暖帯植物として分布上珍稀)

【改頁】

ホルトノキが真鍋島に分布することは昭和五年から判明しており、同年六月十九日に私の採品がある。翌昭和六年岡山県下植物採集動員の際には珍奇の故で腊葉として天覧に供した。その後、昭和二十一年八月二十七日東京市の横瀬琢之氏はこれを懐旧して本樹の種子からの実生一鉢を献上し、現在、皇居内の御庭先に発育しておる由である。

ホルトノキはツンベルグ (瑞典ウプサラ大学教授 一七七五年末朝) の東洋巡遊にあたり世に出た植物であるが、流石のツンベルグもこれを誤って○○し葉形からしてサクラの一種と考え、*Prunus elliptica* の学名を与えた。これを正しく本属に移したのは牧野富太郎博士で、氏は *Elaeocarpus elliptica* と改めたが、後に至ってヘムズレイ氏が印度志那に於て既に記載しておることが判明し、その学名の *Elaeocarpus decipiens* に合併せられた。南洋樹木の研究家、故金平亮三博士 (小田郡出○) は台湾産の別種を区別して *E. makinoi* を区別されたが、これは葉がうすく、葉形狭長で、光沢がうすい。本樹はこのものではないと思う。

さてホルトノキは一見してヤマモ、に似ておるが、花に雄蕊が多いことは特異で、この○はゼニアオイ科に近似する。然し花卉の光が多数に分岐したりして独得であるので一亜目を形成し、世界に一科二属一二〇種を有する。主に南半球の熱帯に産し、印度、マダガスカル島に自生するものである。かような熱帯性の奇樹が本島によく生育しておるは生態分布上から極めて珍とする處である。真鍋島には真鍋氏のホルトノキ原本から實生を分けたものが他に五本ある。山下助役と共に雨中を戸別に調査したる所、左の通りであった。

真鍋島ホルトノキ分布

- 一、 主株 真鍋龍太郎氏所有 目通周囲七・九尺
- 二、 分株 円福寺境内 四・八
- 三、 ” 住友伊三郎氏所有 四・二
- 四、 ” 山下千歳氏所有 三・五
- 五、 ” 久一房莊氏所有 二・〇

【改頁】

ホルトノキの巨樹としては広島県豊田郡大長島に宇津美神社宮脇のホルトノキを筆頭に静岡、和歌山の渚県には若干知られておるが、本県には珍しいもので、右の主株を天然記念物に指定したいと考える。

本株は地上十尺から約五枝に分れ、渚枝は約十坪の面積を被うておる。白〇（樹齢七〇年）がこれにまとうていて樹勢旺盛、真鍋島本浦の港外からも繁茂せる樹冠を認める。〇〇〇の花に似た小白花を生じ、秋は紫紺色の棗形の実を結ぶ。甘酸味があつてヒヨドリが群り食ひ、子供もまた喜んで食する。

【改頁】

真鍋氏系図

備中府志に真鍋城主、真鍋四郎祐久、一ノ谷平家築城の〇、平家に随従、軍功あり、と記され、弟真鍋五郎祐光、生田の森の先陣に戦功をたてたこと源平盛衰記にも見える。真鍋氏荘有の系図について見るに藤大納言信成の子、不節中太夫が真鍋島に配流して、北木、飛島、六島をも領有して真鍋氏を称すとある。系図は「真鍋先祖継圖」と記され、享徳貳年真鍋貞友の記載があつて柴嶋、真鍋嶋は貞友、干嶋、室嶋は五郎威純の領有と明記してある。この柴嶋こそ現在の北木島、干島こそ現在の飛島、室島こそ現在の六島であろう。私は六島、飛島の島名の由来に疑問を持っていたが、図らずもこの系図によつて多年の宿題が解決して愉快であつた。

真鍋島は笠岡から海上五里の処に在つて周圍一里二十七町 面積〇・一六方里（三・一七七方キロメートル） 人口三〇四五人 戸数六九五戸 属島として六島（周一里七町） 大島（三四町） 元小島（六町） 問島（四町） 土生島（五町）があり北は北木島、東は広島、手島、佐柳島、高見島、西は飛島 宇治島に接しておる。西行法師 児島からこの島に渡つてた〇歌がある。

真鍋より塩飽に通う商人は つみをかいにて渡るなりけり（山家集）

また細川幽齋が天正年間、秀吉の九州征伐の頃こゝに来つて島々をよんで

水島を真鍋に入れてたく北木、ひさくはなきか汲めや三郎

【改頁】

とて水島、真鍋島、北木島、柄杓島、三郎島をよみこんである。西行法師のはツミの貝と舟の
權とをもじったもので 兎島の浦田の

おり立ちて うらたに捨う あまの子は ツミより罪を ならうなりけり

と一〇のものである。ツミとは真鍋島の現在ではナガニシの方言であるが、右の浦田のと対照す
ればツミはツブのことで、ヘソクリ、スガイの類であつたらうと思う。

真鍋島ではヨソギ(つのぎ)、ツベタ(つめたがい)、ヒランボウ(たいらぎ)、ドンガン(かぶ
とがに)等の方言が珍しい。この島は川がなくてメダカが棲まず、山には兎は居ない。タンポポ、
レンゲソウ、マムシ等は見ない。

ウバメガシの巨樹

真鍋島の字妙見山ミヨウケンヤマと称する丘に、力神チカラガミ(手力男命)を祀り、この所にウバメガシの巨樹があ
る。根元の周囲一二尺、地上五尺から七枝に分れ、この箇所箇所の周囲九尺三寸ある。内部の一部は
洞穴となり高さ四間ばかり、こんもりと茂って樹勢旺盛である。

昔、讃岐屋佐五郎という船員があつた。(現在は曾孫、實在)○にこの神前にこもって力技を修
行し、今も在る円福寺の供養塔は一人でかついだと伝える。また荷を積んで兵庫に入港の時、積
んであつた多数の米俵の middle の一俵を引き抜いて、またすぐに元のように押し込んだという。米
を積んで帰帆の際に暴風雨があつて、一同上陸して難をさけたが、佐五郎は只一人自ら残つて、
舟を双肩におし止めて波浪に流れるを防いでいた。翌朝風が止んで一行が舟に近寄つてみたら遂
に力つきて立つたまゝ、死んでいたと伝える。

天然記念物

妙見のウバメガシ 小田郡真鍋島村字妙見山、村有

学名 *Quercus phillyraeoides* A. GRAY

目通周囲 九 三尺 根元 一二 〇尺 高 四間 齢 三〇〇年(推定)

【改頁】

現地は山下助役に案内されて行くに本浦の西方約四町程である。ウバメガシの巨樹は左の如く
で、本樹は岡山県下では最大である。全国的に見ても屈指のもので天然記念物としての資格を見
えておる。なお丘の手前に玉姫のウバメガシもある。

ウバメガシの巨樹名木

目通ノ囲 根元ノ囲 齢

白島のウバメガシ 香川県大川郡白島村 一二 〇尺 一八 〇尺 七〇 日本第一位
妙見のウバメガシ 岡山県小田郡真鍋島 九 三 一二 〇 三〇〇 岡山県第一位

小原のウバメガシ	全	浅口郡里崎町	一	一	300	
白石のウバメガシ	全	小田郡白石島	六	〇	八	三 原田〇〇〇荘
玉姫のウバメガシ	全	小田郡真鍋島	五	六	八	〇
円福寺のウバメガシ		児島市下津井	三	六	五	〇 名木
弘法大師衣掛のウバメガシ		小田郡白石島	三	五	一	(埋没) 名木

妙見のウバメガシは速かに環境を整えて顕彰したいものである。

大島のネズミギ

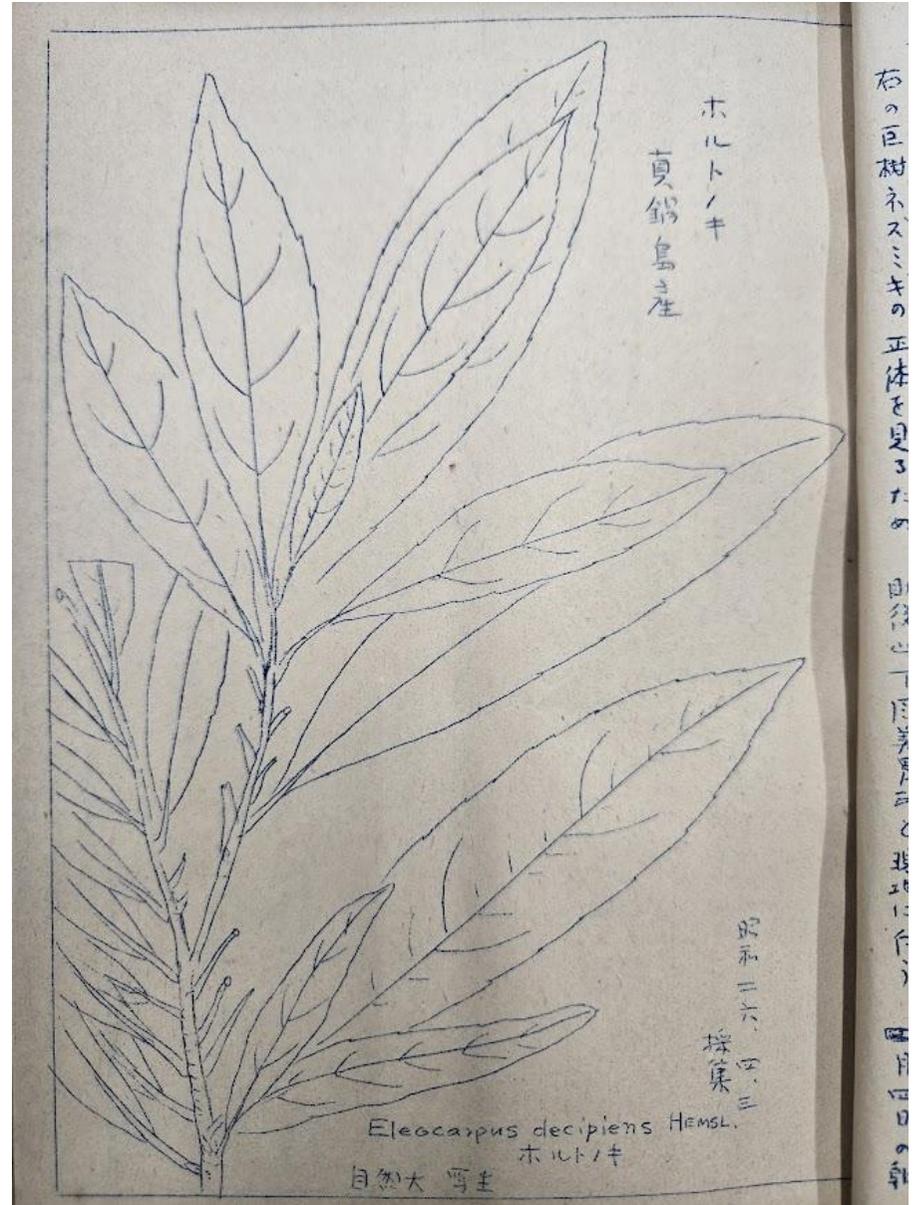
真鍋島の北方、海上にあたって瓢形の小さい無人島がある。周囲三十四町 本浦から東北へ二キロメートル、発動機船で十五分。いま全島を被うて麦があおとおと萌え出で、海上に夢のように浮び出て、北木島の方から望めば正面にあたって正に一輻の絵である。瓢形の右の方の島かげに、中央に一点の黒い場所があり、森かと思われるが、実はこれが一株の巨樹のわだかまっておるものである。

こ、は野鼠の大形なものが盛に繁殖することがあって、東隣の本トコ島との間に、この野鼠が体あたりでイカダを偏み移住を企てたと語らる、処であるためこの木も誰言うもなくネズミギと称し、樹下に山神を祀って豊作の栄えを希った跡がある。

右の巨樹ネズミギの正体を見るため、助役山下風美男氏と現地に向う。四月四日の朝、

【改頁】

【改頁】



「ホルトノキ 真鍋島産」

右の巨樹ネズミキの正体を見たため 自然大写真と現地に合す 昭和四十一年四月の朝

「イヌグス 真鍋大島産」



【改頁】

共に本浦に出で、折から村議山本兼一氏〇舟を以て帰られた際とて乞うて大島へ渡して貰う。大島は中央にくびれがあつて、以北を先ノ島、以南を前ノ島と呼び、連続していたが、近來風浪のため中途の砂礫がさらわれて大潮の時は二島に分れる由。前ノ島を峯に沿うて迂回すれば島にはムギ、除虫菊、エンドウ、ソラマメを栽培し、畔にはボタンボウフウ、タチツボスミレ、ネザ、等が生えておる。北面して北木島と対した側の中腹にあたつて巨樹が茂り見るからにうっ〇たるは即ちネズミギである。近寄つて見るに〇葉樹はカシの葉に似て光沢強く、花芽すでに形を整えて花を準備し、正しく樟科の珍樹イヌグスに他ならず。北に一株、南に一株、相接して生え、樹下は昼なお暗く、山下助役と協力して測〇するに北株は根元周囲二一尺五寸、南株は同じく一四尺ある。(両株は現在は外観して分れて)

天然記念物

真鍋大島のイヌグス 小田郡真鍋島村字前大島五五七〇 村有

(俗名 ネズミギ)

学名 *Machilus thunbergii* Sieb. & Zucc. (くすのぎ科)

尺

北株 (上方に生える)	根元	二一・五	地上	二尺	一七・七
南株 (下方に生える)	〃	一四・〇			一〇・三

高さ 十間 南北 九二尺 東西 七〇尺 枝は七畝分を覆う 齡 四〇〇年推定

おるが、根元は一株であるとの算が大であるから、若し一株であったとしたら根元推定三一尺となる。今回は根元を確かめる準備がないので○に二本として取扱う。）

イヌグスはクスノキ科に属し、クスノキに似ていて材は楠に劣るのでイヌグスの名があり、又別にタブノキ、タコグス等の異名がある。暖地に生ずる常緑喬木で、葉は厚くて光沢があり、長楕円形であるが、クスノキのように三行脈はない。葉緑は全辺で、裏はや、白い。葉柄や枝は緑色を呈して、花は枝の頂部に生ずる。五月に円錐花○をつけて

【改頁】

黄緑色の小花三萼三弁、一雌蕊十二雄蕊を開出する。秋に黒紫色の球状○果を生ずる。

イヌグスの巨樹としては福井、熊本二県のが知られて

小浜神社のイヌグス	福井県小浜市	根圍	三五・三
天神のタブノキ	熊本県鹿本郡	〃	二〇・〇
本樹	岡山県小田郡	〃	二一・五

となっていたが、新に本樹が日本第二位なることが判明した。従来岡山県下では上房郡津川村に道路の傍にイヌグスがあって、分布上珍しいとて道路拡張の際に吉野○介氏の忠言によって残して道の中央にあるのが巨樹であった。これと比べるに

	目通	根元	高サ
津川のイヌグス	県道にあるもの	上房郡津川村	五・六 六・〇 六間
津川のイヌグス	○〇にあるもの	上房郡津川村	六・八 七・〇 五
真鍋大島のイヌグス		小田郡真鍋島 北株	一七・七 二一・五 一〇

右の如く断○本樹はかけ離れておる。天然記念物として十二分の価値がある。この地○に立つて北望すれば、北木島、白石島、高島、神島は一眺に収まり、右に連る陸地は御嶽山、青佐山、龍王山等指○の間にかすみ、寄島、水島、手島等が右に続いていて内海の一勝景である。附近の植物にはヤマモ、ネズミモチ、トベラ、シュロ、ナワシログミ、ネザ、テリハノイバラ、ホソバナカナワラビ、ヤブラン、ヤブコウジ、フユツタ、ツワブキ、イタビカズラ、スイセン等があつて昔は一社が立っていたかと思われる。

正午前に探検を終り、役場に帰り村長久一虎男氏に面会し、本樹は岡山県下に於けるイヌグスの最大なるものであると共に全国でも屈指のものといふべく天然記念物として実に○の○のものであることを告げ、午後一時三十分島を発して帰る。